

## 著作奨励賞

宮本結佳著『アートと地域づくりの社会学—直島・大島・越後妻有にみる記憶と創造』

(昭和堂 2018年10月)

### <講評>

本書は、瀬戸内海島嶼部および新潟県中山間地域におけるアートプロジェクトの事例を通して、地域社会とアートの間で生じる諸問題を分析し、主体間の相互作用によるアートプロジェクトの持続可能性を検討しようとするものである。そのために、日本において現代アートを媒介とした地域づくりがいかに関係してきたのかを歴史的経緯をふまえて整理したうえで、地域におけるアートプロジェクトの嚆矢として知られる香川県直島・大島、新潟県十日町市松之山上鰻池でフィールドワークを実施し、それぞれの事例の概要・歴史とともに、アートプロジェクトをめぐるさまざまな問いについて丹念に調査し、その答えを実証的に導き出している。本書はそれらの成果をまとめた博士論文「アートプロジェクトを通じた景観創造と地域再生に関する環境社会学的研究」(2010年、奈良女子大学大学院人間文化研究科)を大幅に加筆・修正したものである。

本書において特に興味深いのは、従来はアートプロジェクトにおいて受動的な立場に身を置きがちであった地域住民たちが、集合的記憶の形成によって景観を創造したり、地域表象を創出したりする主体となる過程を具体的に明らかにしている点である。そこで、あくまで外部や観光客のまなざしを前提に住民が抵抗を試みるという単純化された図式を想定する文化客体論の問題点を乗り越えるために、住民と来訪者の相互作用による認識の転換に着目し、その結果、資源のあり方そのものが変容していくという「資源形成論」を提起しており、観光まちづくりに関する分析視角の面で新規性を有している。

さらに、香川県大島のハンセン病療養所大島青松園における「つながりの家」の事例や、十日町市松之山上鰻池における「上鰻池名画館」の事例の分析を通じて、地域づくりにおいて、アートという方法であるからこそ可能になるものを明らかにしている点も評価できる。この点については説明がやや物足りないものの、地域づくりの手段はアート以外にも数多く存在し、また、アートプロジェクト自体の希少性が減少するなかで、地域としても「なぜアートなのか」を問う姿勢自体が重要な意味を持つようになってきていることが指摘されている。このことは、地域づくり／観光の資源や手段が多様化し、さまざまな事例研究が蓄積されるなかで、そうした研究の意義を問う本質的な問題提起にもなっていると言えよう。

ただ、著者も述べるように、本書ではアートプロジェクトの嚆矢となった事例にフォーカスする一方で、アートプロジェクトの最新の動向は十分におさえられていない。また、橋本和也が『地域文化観光論』(2018年、ナカニシヤ出版)で地域芸術祭の分析にアクターネットワーク理論を導入したのに対して、そうした新しい理論動向の潮流をおさえられていないなど、理論化にも物足りなさが残る。

しかしながら、本書は地域とアートの関係をマクロな視点・ミクロな視点双方から総合的にとらえた労作として評価でき、アートツーリズムに関する研究においても今後かならず参

照すべき基本文献として位置づけることができる。本書を起点に上記の課題に踏み込んでいけば、さらなる研究の発展も期待できるだろう。よって、本書は、著作奨励賞に該当すると考える。